教師から見たスクールカウンセラーと地域との連携

栗原　慎二
（広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター）

1 スクールカウンセラー事業の評価

スクールカウンセラー（以下，ＳＣ）の全中学校配置が目前となっている．この事業の予算規模が拡大してきたことは，実際の成果とともに財務省の評価も基本的には高いことを意味しているが，一方で財務省は，平成16年度の予算執行調査事業概括表の中で，「配置校における問題行動の減少率は，未配置校のそれを若干上回っているものの，今後，さらに大きな成果を上げていくための方策を検討することが課題」「一定以上の配置率に達すると，配置率の向上が必ずしも比例的に問題行動件数の減少につながっていないのではないか」と問題点を指摘している．また，「「準ずる者」を多く活用している自治体において，大きな事業成果を上げている例が見られる」ため，「「準ずる者」をより活用し易くすべきである」とも述べている．これとは別に文部科学省（2003）は，「今後の不登校への対応のあり方について」の中で，ＳＣを含む学校関係者が相互の役割について理解した上で一致協力して対応にあたること，校内サポートチームを作ること，外部の専門機関とも協力・共同支援体制をつくること等の重要性を指摘している．

以上のことから，ＳＣにはさらなる活動の改善が必要であること，そのためには「連係」あるいは共働（コラボレーション）が重要な課題であることが理解できる．

2 連係の実際

では，実際のＳＣの連係はどのようであろうか．その形態を考えてみる．

1）カウンセリング中心の形態

ＳＣが生徒，保護者，担任と個別に関わる形態である．臨床モデルをほぼそのまま学校の中で実践するような形で，ある意味では最も一般的な形態である（図１）．ＳＣは必要に応じて地域・社会資源を活用するであろう．この形態の問題点は学校システムとのかかわりが薄いとこと，協力的な教師としか連係ができないこと，場合によっては担任からの丸投げになってしまい，かえって学校の教育力を奪う可能性があることなどが挙げられる．

2）担任へのコンサルテーション中心の形態

ＳＣが生徒や保護者への直接的サービスとしてカウンセリングを行うのではなく，担任へのコンサルテーションを通じて間接的に生徒や保護者にかかわる形である（図2）．この場合も必要に応じてＳＣの把握している地域・社会資源の活用が図られるであろう．担任を情緒的にも現実的にも支援するという意味では，学校の教育力の向上に寄与するモデルということができる．しかし，協力的な担任とのみ連係することになる可能性も高いし，学校システムとのかかわりはやはり十分ではない．

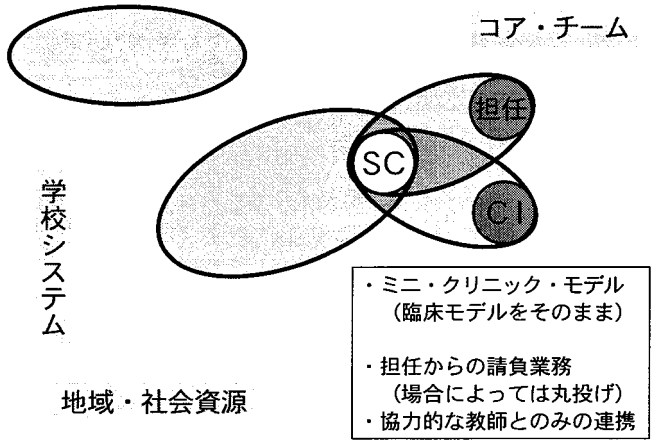


図1　カウンセリング中心の形態

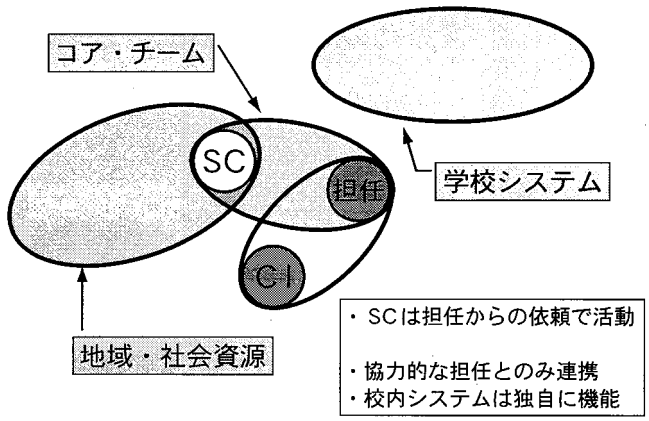


図2　担任へのコンサルテーション中心の形態

3）教師カウンセラーへのコンサルテーション中心の形態

相談係（教師カウンセラー；TC）や生徒指導主任，学年主任といった校内のキーパーソンに対するコンサルテーションを行うモデルである(図3)．彼らは学校システムを動かす立場にあるため，例えば複数の人間がかかわっているいじめ問題などに対応する場合には適したモデルと考えられる．しかし，その一方で担任への支援は教師カウンセラーを媒介とした間接的であるし，保護者や子供への支援はさらに間接的になる．したがって必要な支援が必要な人に届かないという危険性も考えられる．

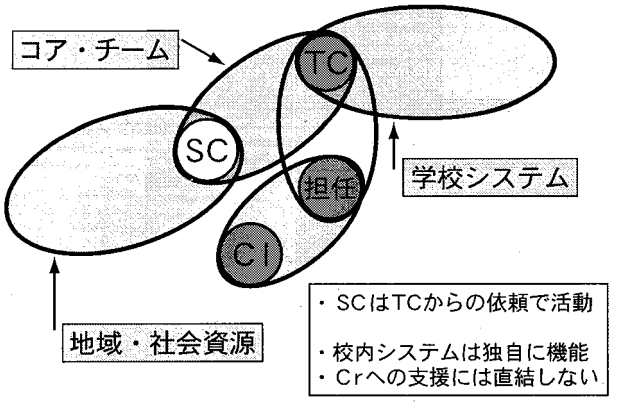


図3 TCへのコンサルテーション中心の形態

4）高密度な連係の形態

上記３つを合わせた形態で，ＳＣは地域・社会資源との積極的な連係を念頭に置きながら，困っている担任がいればコンサルテーションを行い，必要があれば生徒や保護者にカウンセリングを行い，学校全体や学年の教員全体の協力が必要であれば相談係や生徒指導主任，あるいは学年主任との連係を進めるといった形態である(図4)．これは，ある意味では理想的な形態であるが，ＳＣの勤務時間の実態等を考えれば，時間の不足は明白であるし，連係の過程での各種の齟齬やタイムラグが生じる可能性も高い．

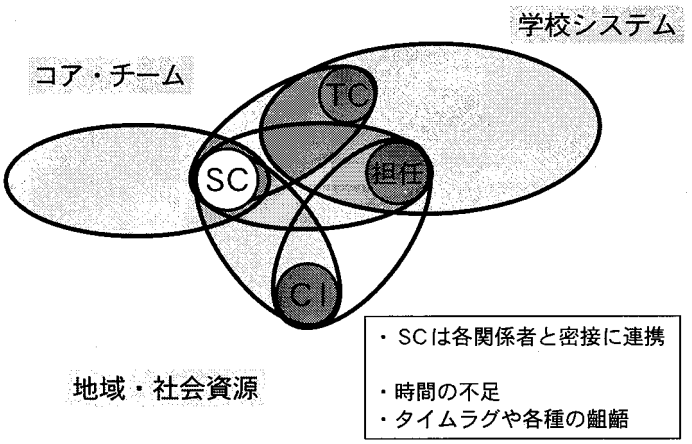


図4 高密度な連携の形態

5）チーム支援モデル

この形態はＳＣ，教師カウンセラー，担任，学年主任，養護教諭などがコアチームを作り，関係者全員が統一した理解と方針のもとに一致協力して生徒や保護者の支援にあたるというモデルである(図5)．コアチームの中

では「①情報の共有，②判断の共有，③方針の共有，④役割の分担」が行われ，コアチームが支援プロセスと支援体制の全体を統括する．このモデルは地域・社会をも背後にある資源として活用しながら学校コミュニティ全体で生徒や保護者を支援していこうとするコミュニティ・ベース・モデルでもある．

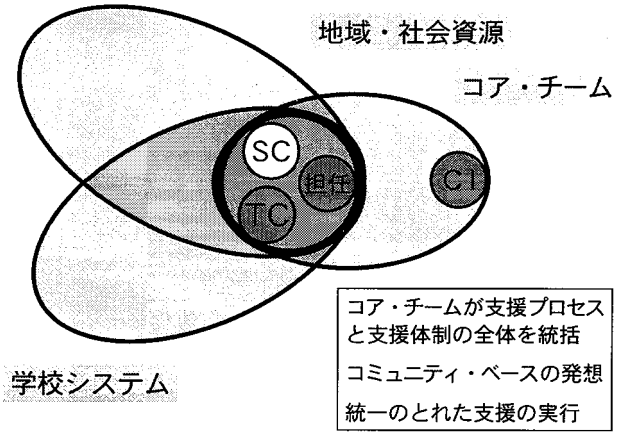


図5　チーム支援モデル

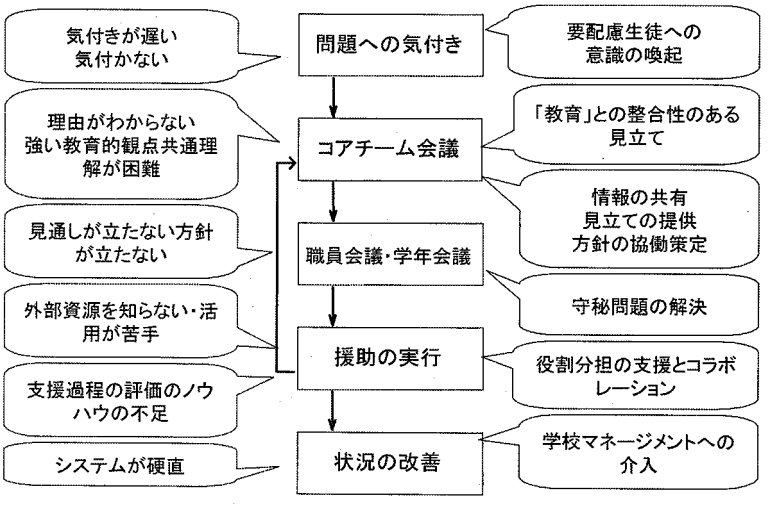


図6　治療的支援の現実的困難とSCの活動

6）連係の理想型

ＳＣは状況に応じて今述べた５つのモデルを使い分けながら，この領域における活動を行っていることになるが，連係重視という理念にもっともかなった連係の在り方はチーム支援モデルだろう．ただし，チーム支援を進

めるにあたっては現実には多くの課題がある(図6)．例えば，アセスメントにおいても教育との整合性のある見立てを提示しなければ教員は動きにくいし，情報共有に際しても守秘義務との整合性をはかった上での情報共有のあり方が必要になる．支援プロセスの評価やマネジメントも重要だが，こうした発想やそのためのスキルは教員だけでなくＳＣにも不足していると言えるのではないだろうか．こうした諸課題に十分応えられる力を，教師もＳＣも身につけていく必要があるだろう．

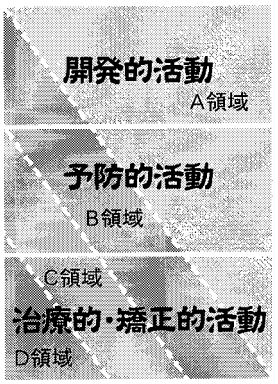
3 学校カウンセリングの領域と活動の在り方

学校カウンセリングの視点からここまで述べてきたことを端的にまとめれば，「不登校の生徒の再登校支援」といった「治療的領域」における活動を，今後いっそう効果的に展開するためには，チームを核とした取り組みを進める必要があるということである(図7)．

しかし，こうした治療的活動も重要であるが，ハイリスク群の生徒が問題状況に陥らないようにするための「予防的・開発的領域」の活動もそれと同様に重要である．

このような活動は，通常は学級における一斉指導として行われることが多い．なぜならハイリスク群の生徒は「ごく普通に教室に座っている」からである．こうした生徒に対してストレスマネジメント教育を行ったり，コミュニケーション訓練などを通じて，人間関係につまずく前に人の気持ちを理解し的確に自分の思いを人に伝えることのできる力を育てるということである．さらに言えば，不登校の生徒がでにくい，あるいは不登校であった生徒が再登校しやすい学級や学校づくりといったことも極めて重要な課題になる．

こうした活動は重要であるが，もはや個別臨床を超えた発想や能力が必要とされる．そのすべてＳＣが担うことは当然困難であるし，担う必要もない．必要なのは，教師とのコラボレーションによって，このような領域の活動にＳＣが貢献することであろう．



A領域＝担任の活動領域
　生徒への最終的な関与者
　個人面接は活動の一要素

B領域＝養教・相談係等の活動領域
　個人・集団・システム等への関与

C領域＝SCの活動領域
　個別支援
　D領域とB領域をつなぐ役割
　集団・システム等への関与

D領域＝外部機関の活動領域

図7　学校カウンセリングの3領域

4 学校システムにおける活動

ＳＣが派遣されている学校にはチーム支援という発想を持っていない学校の方が多いだろう．心理教育といった発想もこれまでの学校教育にはあまりなかった発想である．子供たちの発するさまざまなサインに対する理解も十分ではないかもしれない．ＳＣの重要な役割の一つは，こうした学校風土を変えていくという視点や発想を持ちながら学校に関わるということ，すなわち教育相談的な学校風土，教員集団の教育相談的資質の形成に貢献することであろう．というのも，チーム支援や心理教育といった発想に乏しい学校であれば，心理・社会的な問題は発生し続けるだろうし，発生した問題の解決も容易ではないからである．

おわりに

ＳＣ事業はカウンセリングやコンサルテーションを通じて個々の問題を解決することが目的ではなく，「外部の専門家の協力を得て，学校における教育相談体制の充実を図ること」を目的としている．この目的を果たすには，ＳＣと教師との質の高いコラボレーション，地域・社会と学校の連係が必要になる．そのためにＳＣが自らのリソースを生かして活動することを，教師はＳＣに期待しているのではないかと考える．